

子どもの「生きる」と響きあう

村中李衣

希望の正体

唐突だが、わが家の畑の話。彼岸過ぎにジャガイモの植え付けをした。六畝もあるので、種イモを等間隔に植え終わるころには、へろへろ。雑草除けに黒いビニールマルチを張るようにと連れ合いから次の作業指示を受け「え、かんべんして」。途中まではなんとかマルチを張ったが、最後の一畝だけは、見ないふりをした。一か月が過ぎ、マルチをかけていた畝のジャガイモたちは元気にたくましく育っていたが、手を抜いた一畝だけは雑草まみれで、ここにジャガイモの茎があるのか、どれがジャガイモの葉っぱなのか判別できない。ジャガイモの茎や葉っぱによく似た草たちが「へん、おいらだけをぬけるもんなら、ぬいてみる。おまえさんの大事なジャガイモとやらも、いっしょに連れてくことになるぜ」とわざわざ不敵に揺れる。

「まあ、なんてこと！ あんたたちなんかにうちの大事なジャガイモを奪われてなるもんですか。どいてちょうだい！

どいてちょうだい！」私は、雑草を一本ずつ引き抜きにかかった。すると、大威張りではびこっていた雑草たちは、思いのほかあっさり、しゅぼしゅぼ抜けていった。

どんなもんですよ後ろを振り返り啞然。支えを失ったジャガイモたちは、すっかり地面に倒れ伏していた。良かれと思っただけの排除したものが、意外にもわが子の唯一の支えだった。そいつらがいてくれて、そいつらとひ弱ながらもたれかかっていたからこそ、厳しい環境の中で何とか自分を維持していたのに、今さら正義を振りかざされ、一人で強く生きよと言われてもなあというジャガイモたちのつぶやきが聞こえてくるようだった。

ああ、最初にきちんと手を入れ、一人で育ていける環境を整えることをしないで、大きくなってから中途半端な干渉をした私が間違っていたと、さめざめ泣いていたら、農家育ちの連れ合いが「放っておくしかない。それでも育つものは育つ。ここは土がいいからな」。